

イチゴタルト再び

「棗、お土産や！」

蜜柑がケーキの箱を持って棗の部屋にやってきたのは、日曜日の午後。

時刻はすでに三時半過ぎ。陽の短い冬場の今は夕方と言ってもいい時刻だろう。

セントラルタウンに新しく出来たケーキショップに今井や飛田と行ってきたらしい。

なぜ俺を誘わないのかと不機嫌になると、蜜柑は「へ？ アンタも行ったかったん？」と逆に不思議そうな顔になった。

「でもケーキ屋さん、すっごくかわいいお店で、女の子で一杯なんよ。アンタ、そういうとこ嫌いやる」

確かにそうだが。

だが、日曜日に恋人を放っておくってのはいいのかよ。

眉間にしわを寄せる棗だったが、蜜柑は全く頓着せずにお皿とフォークを出してくる。

「このイチゴタルトがむっちゃおいしいそうで、アンタにも食べさせたらうと思ってる」

そう言いつつ蜜柑はケーキの箱からイチゴタルトを取り出す。

「はい」と蜜柑が差し出した皿に乗っているタルトは、小ぶりの真つ赤なイチゴが山のように盛られ、さらに艶やかなシロップが掛けられている。その間からわずかに覗くカスタードクリームは所々にバナビーンズの混ざった綺麗なクリーム色をしていて、イチゴの赤さを余計に際立たせており、確かに旨そうだった。

蜜柑はもう一つイチゴタルトを取り出し、うれしそうに自分の前へと置いた。

「……お前、ケーキ食ってきたんじゃないのかよ」

「さつきはチョコケーキを食べてきたんよ」

呆れた口調の棗に、蜜柑は「種類が違うんやから別腹や！」となぜか自慢している。

「太るぞ」

日曜日に放つて置かれた腹いせも込めて呟いてやると、蜜柑はぶくつと頬を膨らませた。

「うるっさいなあ、アンタは。ええもん、ちよつとぐらい、大丈夫なんですーウチ、元々スリムやしー」

「そうだな。都合よく脂肪が胸に行くといいけどな」

「な——っ！」

「もうちよい揉みがいがあった方が、俺もうれしいしな」

「アアアアンタは、アンタは、なんちゅーことをっ!!」

蜜柑は棗に掴みかからんばかりだ。

その手を避けながら、棗は蜜柑の皿を指さした。

「ほら、食わないのか」

「食べるに決まっとするやろっ！　そもそもウチがせっかく買ってきたのに、棗は余計なことばっか言いおって！」

蜜柑はぶんぶん怒りながら、フォークをタルトに突き刺した。

けれど、タルトはフォークでは食べにくい。

蜜柑は何度かフォークをグサグサとタルトに刺した後で、フォークを諦めて、お皿ごと持ち上げた。

棗は最初からフォークを無視して、手づかみでタルトを食べている。

「おしこい？」

蜜柑の問いに、「まあまあだな」と素っ気ない返事を返す。とたんに蜜柑が嬉しそうに笑った。

「えへへ。アンタがそういう返事するときはおいしいってことやもんな」

蜜柑は先程まで怒っていたのも一気に忘れられしく、棗を見習って手づかみでタルトを機嫌良く頬張った。

「うん。おいしいっ！　イチゴのすっぱさと、カスタードの甘さがちょうどええ感じやな」

蜜柑は実を楽しそうだ。棗も小さく笑った。

彼女の鼻先に、カスタードクリームがちよこんと付いている。ガキか、お前は。

「そういえば、」

ふと初等部のときのことを思い出した。

「昔、お前がイチゴタルト、作ってきたことがあったな」

棗がそういうと、蜜柑は一瞬目を見開き、うれ「しそくに笑った。

「覚えとってくれたん?」

「まあな。あんな風にかわいい顔で差し出されて、忘れるわけがねえだろ」

「う……」

棗がそう言ったとたん、蜜柑は頬を赤く染めて棗から視線をそらした。

「また作ってこい。上手くできてたら食ってやるよ」

「……ええけど」

蜜柑は棗から目をそらしたまま、小さくつぶやく。

その頬は赤いままだ。…かわいい。

まあ、せっかくの日曜日に恋人を放つて置いて遊びに行つたのだとしても、こうして自分のことを気にかけ、来てくれたわけだし。棗の愛想のない返事でも、とたんに機嫌を直すほどうれしいらしい。初等部のころも、今も、こうやって棗の一言でかわいい顔を見せてくれるわけだし。

蜜柑はぶつぶつと「おいしそうなイチゴがまた手に入ったら……」とつぶやき、それから急に気を取り直したらしい。

「でもまず今日のケーキ屋さんやな。棗が嫌やなかったんなら、今度は一緒に行こうな。楽しみやー」とにこにこ笑いながら、タルトの最後のひとかけらを口の中に放り込んだ。

カスタードクリームはまだ、鼻先に付いたままだ。

まったく。

棗は蜜柑に素早く近づき、目を丸くしている彼女の顔に自分の顔を近づける。

蜜柑の鼻先のクリームを舐め取ると、眉間にしわを寄せた。

「……確かにクリームだけじゃ甘すぎるな」

棗がそう呟くと、蜜柑がイチゴのように真っ赤になり、

鼻を手で覆った。

「ああああなたは、なにをとつぜんっ」

「鼻にクリームが付いてた」

「そ、そーゆーのは口で言うてやっ！」

赤い顔のまま噛みつくように言う蜜柑に、棗は薄く笑つた。

「今日一日放つておかれたんだ。これぐらい、いいだろ」

蜜柑は一瞬きよんとした顔をした後で、罰の悪そうな顔になった。

「や、悪かったと思つたから、イチゴタルト買ってきたったんやろ」

お前、悪かったと思つたのは今だろ。

棗は蜜柑の両手を引つ張り、バランスを崩した蜜柑を抱き締めた。

「ちょ、棗！ アンタも行きたいんやったら、今度は一緒に行こうって！ イチゴタルト作ってきたるし!!」

まだ見当違いのことをもごもご言い続けながら、蜜柑は棗を押し返そうと抵抗している。

その彼女の耳元に、棗は唇を押し当てた。

「イチゴタルトよりもいいが、今はこっちがいい」

最早耳たぶや首筋まで赤く染まった蜜柑の顎を指先で無

理矢理上げさせると、潤んだ目が棗を見上げていた。

形ばかりの抵抗はすでに潰え、その瞳に浮かぶのは、甘い予感。

頬は赤く蒸気し、紅い唇が棗を誘うように小さく震える。

つい先程クリームを鼻に付けたままで無邪気に笑っていたとは思えないほどの艶やかさだ。

一日放っておかれた不満など、どこかへ吹き飛んでしまった。

棗は誘われるまま唇を重ね、今度はじつくりとその柔らかな唇を味わった。